

「お父さん、ごめんね」
妻の優しい言葉に
支えられて



伊藤芳蔵さん 83 歳

■ 病弱だった妻がとつとつ 車いす生活になつて

若い頃から病弱だった妻が、8年前に膠原病を患い、入退院の繰り返しから車いす生活になりました。介護認定を受け、訪問診療・看護、入浴サービス、デイサービス、ヘルパー派遣等の介護サービスや食事宅配サービスを受け、子どもたちの力も借り、自宅での介護を続けました。

■ 「お父さんごめんね」の言葉 でほつておけない気持ちに

サービスは日中だけだったの

介護 人時代 備えて～

護するの当たり前
身的な介護も話題に
不幸な介護の事件も
れな家事や介護、仕事
ための退職、そして、
「介護は苦しいだけ」
や地域と出会うチャン
に考えてみませんか。

(近藤)

「国民生活基礎調査」(平成 25 年)

で、夜間は一人での介護です。排泄等で夜中に2〜3回は起きてトイレの介助をしなければならず寝不足になりました。また、畳職人だったことから腰痛の持病があり、トイレの介助は大変でした。しかし「お父さん、ごめんね」の優しい言葉にほつておけない気持ちになり、介護に励みました。家事については、病弱な妻を支えるために以前からやっていたので、苦労することなくこなしました。

■ 妻を看取つて

最後は要介護5の寝たきりの状態でしたが、さまざまなサービスを利用して、自宅で看取ることができました。妻の最後の言葉「お父さん、ありがとう」の音が忘れられない。「やっぱり寂しい」…。しかし、趣味の競馬や韓流ドラマを楽しみ、お茶のみ友達もできました。腰痛のリハビリに通い、要支援認定を受けてヘルパー家事援

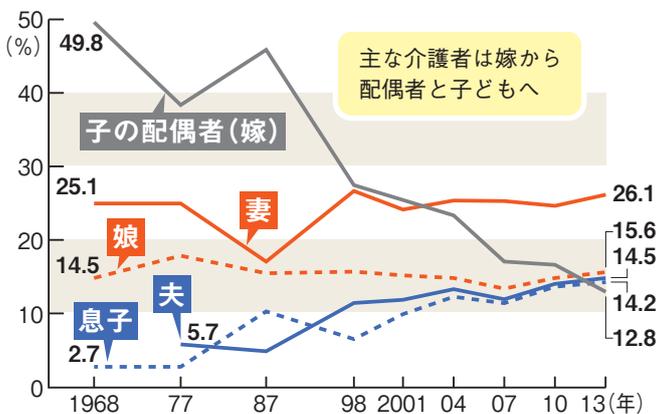
助を利用し、自分の今後のこともきちんと見極めて、不自由なく暮らせています。

■ インタビューを終えて

男性の介護は気負ってしまいがちといわれていますが、自然体で介護と向き合い、介護サービスを上手に利用された伊藤さん。戦中戦後の厳しい時代を越えて出会われたお二人の関係を伺い、妻の最後の言葉を思い出して目を潤ませられた様子に、私たちも胸が熱くなりました。「それまで」の歩みの中に大切な鍵があるのかなと思

(近藤)

同居の主たる介護者の続柄別年次推移



出所 1987年までは全国社会福祉協議会調査、1998年以降は厚生労働省の「国民生活基礎調査」(世帯表)より。いずれも「その他の家族」は除く。

何でも相談できる

地域包括支援センター

地域包括支援センターは、地域の高齢者およびその家族への総合的な支援を行っています

毎日の生活の中で、不安なことなど何でも相談できます。清瀬市には、地域ごとに4か所の地域包括支援センターがあります。私たちが安心して暮らせるように介護、福祉、健康、医療など、さまざまな面から高齢者や、家族を支えてくれます。介護保険の手続きの仕方から、その後の介護サービスの受け方、認知症や介護疲れ、施設入所に関する相談ができません。

相談のしかた

地域包括支援センター窓口での相談、電話での相談のほか、センターまで行くことができない場合は、自宅に訪問もしてくれます。

相談できること(例)

- ・ 介護や健康について
- ・ 介護予防、介護保険に関すること
- ・ 要支援認定の方のケアプラン作成
- ・ 体調不良、健康維持
- ・ 認知症 等
- ・ 権利を守ることにについて
- ・ 消費者被害(振り込め詐欺など)
- ・ 成年後見制度(財産管理など)
- ・ 高齢者虐待 等

スタッフはどんな人

主任ケアマネジャー、保健師、社会福祉士の3職種が互いの専門性を活かしながら、チームで対応しています。



お話を伺ったスタッフの内田さん(左)と豊田さん